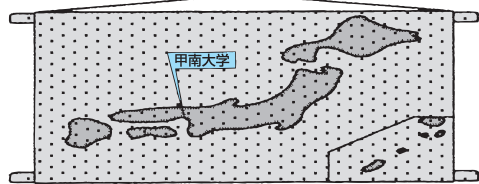


Zephyr

ゼフィール・にしかぜ

〈第32号〉


<http://www.kilc.konan-u.ac.jp>

ことばと文化 ―外国語の授業における言語と文化―

ことばを学ぶときに大切なことは…

外国語学習と異文化理解を通じての知性形成

―問題の所在を見抜き、誠実に問題解決に対応する能力の涵養のために―

郷に入っては郷に従え―フランス語の授業における言語と文化―

国境を越える「我不会死的（僕は死にません）」―中国語の授業における言語と文化―

外国語の授業における言語と文化の総合的学習（韓国語）

異文化の中で、異文化と対話する―日本語の授業における言語と文化―

2005年度国際言語文化センター活動報告

原田 登美……………	1
ポール・ロス……………	2
柳原 初樹……………	3
中村 典子……………	4
石井 康……………	5
金 泰虎……………	6
森川 結花……………	7
	12

ことばと文化

― 外国語の授業における言語と文化 ―

国際言語文化センター所長 原 田 登 美

皆さんは「文化」という言葉からどんなことを思い浮かべるでしょうか。日本文化なら歌舞伎、能、茶道や華道などの伝統文化、もっと広く世界的になら音楽、絵画、ダンスなどの民族文化と呼ばれるものなど、歴史や地域や集団に根ざした学問的なレベルのものを考える人は多いでしょう。しかし、文化というのはもっと日常的で生活に根ざしたもの、例えば、日本では靴をぬいで家に上がるとか、食前・食後には「いただきます」「ごちそうさま」と言うとか、兄弟姉妹を呼ぶのに弟や妹は兄や姉を「おにいちゃん」「おねえちゃん」と呼ぶが年上の方からは「おとうとちゃん」「いもうとちゃん」とは決して呼ばないなど、毎日の生活に密接に結びついたことなのです。だから甲南大学に來ている外国人留学生に「なぜ日本へ来ようと思ったのか、どうして日本へ留学したのか」と尋ねると、「日本語を勉強するには日本人の生活や習慣をよく知りたいと思った」とか「日本で暮らして日本人とコミュニケーションをしながらの方がずっと日本語が上達すると思った」と返事するのは、「ことばの学習と文化」という関係を考える上でたいへん本質的で的を得たものだと言えます。

「生活に根ざした文化」ということについてもう少し概念化して考えてみますと、それぞれの文化には「食べ物と料理方法」「生活習慣とマナー」「時間と距離の感覚」、「親子・夫婦・教師と学生・友情などの人間関係のあり方」、「表情・しぐさとジェスチャー」「価値観」、「コミュニケーション・スタイル」などいろいろな要素が溶け込んで、それらがさらに「知識、経験、信念、宗教観、宇宙観」などの諸相の集大成を成していると言えます。そして、それらの文化がことばと結びついて言語の体系となり、「言語と文化」が一体化して人間の生活の核を成しているのです。「文化とは何か」を簡単に項目化してまとめると、1) 学習されるもの、2) 集団によって共有されるもの、3) 普段意識しないもの、4) 世代から世代へと引き継がれるもの、などと特徴づけられます。

「ことばを学習することは文化を学ぶことだ」とよく言われますが、私達が外国語を学んでいて楽しいのは、一つにはその外国語を使ってその文化圏の人とコミュニケーションできることがあり、さらには新しい文化に接触できるという楽しさがあります。そして、もう一つ大切なこと

は、私達は外国語を学びながら、実はその外国語の文化と自分の文化を照らし合わせて、その中で自分を無意識の内にも見つめ直し、自分の中に異なる文化の要素を取り入れては新しい認識や判断力を培っていることです。つまり今までの自分に新たな要素を取り入れて無意識の内にもさらに新しい自分を育成しているのです。

だから外国語を学んでそのことばを使っていると、自分の心が今までよりもっと幅が広くなり、視野が広がって、成長したような感じがするでしょう。この感覚と喜びこそ、「言語と文化」の結びつきから来るものです。この視野の広がりこそ「言語と文化」を身につけたことに由るもののなのです。そして外国語を学びながら自分を発見し、さらに自己表現しようとする意欲の原動力を生み出しているのです。「外国語と文化」の学習は、最終的には自己発見から自分自身の文化を育み、自己形成へとつながり、それが相手へのおもいやりと理解に結び付いていきます。

以上のような「外国語と文化」の学習について、国際言語文化センターでは、「複数の言語の修得を通して、異文化と自文化を理解する広い視野を育み、言語や文化の多様性を尊重する複眼的な志向と価値観を育成する」ことを教育の理念に掲げています。英語を含め二つ以上の外国語を学び、多言語の学習を通してさまざまな文化を理解する心を養い、世界の人々と共存していく国際人となるのが、甲南大学における「ことばと文化」の教育の目標なのです。

そして、「外国語の修得は言語と文化の学修の適切なバランスにある」という考えから、英語においては「中級・上級スピーチ・コミュニケーション」や「上級英語グローバル・トピックス」の科目で、第2外国語においては、「国際文化科目」の「言語と文化 ドイツ・フランス・中国・韓国」そして「国際理解」で、また「外国語科目」の「中級外国語科目Ⅳ」の「各言語圏の事情」の科目で、文化に焦点をあてた授業を行っています。さらには、「外国語科目」あるいは「国際言語文化科目」の「C-1 ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語インテンシブコース」と「C-2 英語インテンシブコース」の科目として、現地に滞在し約1ヶ月の外国語の語学講座を受けながら、その国の文化を直接体験して言語と文化を学ぶ「海外語学講座Ⅰ、Ⅱ」が用意されています。また、海外の協定校へ1年間の長期で留学し、生活の中で言語と文化を学びながら単位を修得するという機会も与えられています。文化と外国語を学びながらぜひとも新しい自分発見にチャレンジしてみてください。

ことばを学ぶときに大切なことは…

国際言語文化センター ポール・ロス

「言語と文化は硬貨の表裏」ということわざがありますが、どういう意味かわかりますか。学問的には、たとえば言語学、社会学、人類学などでも言語と文化の関係を研究しているのですが、それぞれ定義が微妙に違うのです。私自身は外国語教育ではこの2つはどう結びついているのか興味があります。今から説明しますが、甲南大学ではみなさんも外国語を少なくとも二つは勉強していることすし、ぜひ興味を持って読んでください。

まず外国語教育の分野では言語と文化の関係は次の3つに大別できます。

- (1) 言語は文化を理解する鍵である
- (2) 言語は文化を体験する手段である
- (3) 言語は文化固有のコミュニケーションの方法を表している

もう少し詳しく見ると…

(1)の「言語は文化を理解する鍵である」という考えは一番よく知られていて歴史も古いでしょう。その国の文化に対する知識が増えればその文化に固有の思想、価値観、信念などが理解できるという考えです。昔は文学を勉強することでその言語の文化がわかるとされていましたが、近年はインターネット、新聞、雑誌、映画、歌詞など様々なものに接することで、その文化を理解しようとする傾向があります。いずれも基本的な考えは同じです。文化を知れば違った生き方や違った考えを理解できるとするものです。

(2)の「言語は文化を体験する手段である」というのは近年になって出てきた考え方です。(1)より实际的で、言語を手段として、違う文化の人と直接コミュニケーションをはかろうというわけです。これは「コミュニケーション・アプローチ」という言語教授法の基礎になっている考えです。コミュニケーション・アプローチは少なくともこの25～30年、世界的に最も教育現場に影響を与えた教授法です。

(3)の「言語は文化固有のコミュニケーションの方法を表している」というのはどういうことでしょうか。外国語でコミュニケーションをとったことがある人はわかると思いますが、言語を「適切に」使うというのは難しいものです。たとえば人をほめる場合を考えてみましょう。どのようにほめるか、誰をほめるか、何をほめるか、ほめられたら何と答えるかは文化によって違うのです。「お上手ですね」とほめられて「ありがとうございます」と答えるのが適切な文化もあれば、否定して「いいえ、まだまだです」と答えないと傲慢な人と受けとめられる文化もあるでしょう。

私の体験をひとつご紹介しましょう。アメリカの友人がたびたび日本に来るのですが、日本の店員が「いらっしゃいませ」と大声で言うのに驚いたそうです。「何と答えたらいいの」と聞かれました。今まで考えたこともなかったのですが、特に答える必要はないと言いました。「じゃあ店員さんににっこり会釈すればいいの」と聞かれたので「そうしてもいいけど、しなくてもいい」と答えました。友人はさらに驚いて「会釈もしなかったら店員さんを見殺しすることになって失礼じゃないの」と言ったのですが、日本では特に失礼にはあたらないと答えました。アメリカでは "Good morning, can I help you?" と店員が言うと客は何か返事をするようになっていきます。見殺しするのはよくありません。最近では "Can I help you?" のかわりに "How are you today?" のように個人的な挨拶をする店員も増えているようです。一部の人には違和感があったとせよと不評ですが、とにかく客は何か答えるべきだとほとんどの人は思っています。何も答えないのはあまりにも失礼なのです。

他にもいろいろな話がありますがこのあたりでやめておきましょう。つまり私が言いたいのは日々の何気ないことにも、どうふるまうべきか文化的な決まりがあって、それは「ことば」で表されるということです。外国語を学ぶときには文法、発音、語彙などを勉強するだけでなく、文化的にどういう行動をとるべきかも学んでほしいのです。

最初に言語と文化は表裏一体と述べましたが、文化を学ばないで言語を学ぶことはできないのです。国際言語文化センターではみなさんが言語と文化の両方を学べるようにプログラムを組んでいます。みなさんもぜひ興味ある外国語を学び続けて、言語と文化の関係を自分自身で考えてみてください。

外国語学習と異文化理解を通じての知性形成

—問題の所在を見抜き、誠実に問題解決に対応する能力の涵養のために—

国際言語文化センター 柳原 初樹

小泉首相の異文化理解

小泉首相の靖国参拝問題が、国内外から批判されています。皆さんの中には、「構わないじゃないか、外国から内政干渉されるべきではない」と考えるかたもおられると思います。参拝の是非については、今回は話題からはずしておきましょう。ただし、今年の5月に靖国を参拝した後の首相の発言は一国の首相としては全く中国の文化・思想に対する理解・知識を欠いたものであることが判明しました。首相は同神社への第二次大戦のA級戦犯合祀と参拝の関係について『罪を憎んで人を憎まず』というのは（中国の）孔子の言葉だ。一個人のため参拝しているのではない」と説明しました。まず、この引用が間違いです。これに関しては、中国文学が専門の一海知義名誉教授の文章（朝日新聞平成17年6月3日）を読んでください。一海教授は、問題は首相の「断章取義」であると指摘しています。

「これを聞いて驚いた。私は50数年来、専門の対象として中国古典を読んできたが、孔子がこんなことを言っているとは知らなかったからである。少なくとも、信頼できる文献には見当たらない。（中略）戦後首相の中でも、小泉首相は特に中国古典がお好きらしい。施政方針など、さわりの所『孟子』を引き、『墨子』を引くといった具合である。しかし、おおむね『断章取義』的な引用が多い。断章取義とは、原典の趣旨とは無関係に、ときには趣旨に反して、自分に都合のよい部分だけを抜きだして引用することである。これは中国では古来、軽蔑されてきた手法である。孔子思想の特徴は『仁』の重視だとされるが、『論語』で孔子は『仁とは〇〇である』とは単純に示してはいない。人間や社会を複雑な存在と見ているからである。つまり、その思想を理解するには、『論語』全体を読む必要があるのだ。またそもそも『罪を憎んで人を憎まず』は加害者だった側が使うべき言葉なのか。首相発言は中国民衆の立場を無視している。」（下線部筆者）

学習の基本＝問いかけと誠実な取り組み

私達教員は、研究活動において論文を執筆したり、口頭発表を行います。そのさい、最も重要なルールは、引用の仕方です。「誰が」、「いつ」、「どこで」、「何を」、「どのように」主張したのか、発見したのか。そして自分はそれに対してどのような立場を取るのかを出来るだけ明示的に論証しなければなりません。引用が間違っていたら大変なことになりますし、他人の考えを無断で自分のものとして発表すれば、研究の世界からは追放されますし、訴えられることにもなりかねません。

なぜ、このようなルールが存在しているかと言えば、思想表現や発明が個人によってなされる限り、その個人への敬意を守らなければならないからです。ある思想や芸術表現を獲得するために、個人がどれほど労力を注ぎ、苦悩してきたか（楽しみながら、それが出来るのが理想ですが）。また、自然科学分野においては莫大な投資もなされたことでしょう。

ここで、個人を或る国やその国の文化（異文化）に置き換えて考えてください。その国の文化（文化リテラシーには政治文化・法文化・市場モラル・報道モラル・学校教育の理念なども含まれます）が形成されてきた背景には、さまざまな歴史的経緯があります。また、その国の言語もれっきとした文化現象です。外国語を話すことはその国の文化とそこに生活する人々に対する敬意の表現でもあります。敬意を持って話す限りは、精確な発音、語彙、文法を意識して話したい

ものです。また、その国の人々の価値観や行動を理解するためにも、その根本にある異文化を誠実かつ精確に理解するようところがたいいものです。

そうはいても、みなさんの中にはドイツ語を勉強していても具体的にドイツの文化を感じることが出来ないと考えておられる人もいるでしょう。そんな方は、「中級ドイツ語 IV」や「言語と文化ドイツ」を受講してください。これらの授業では、ドイツ語圏の歴史、音楽、食文化、社会制度、教育、若者文化、観光などを学ぶことができます。あるいは、是非ドイツ人の若いチューターと2泊3日間セミナーハウスでおこなうドイツ語合宿や毎週月・水の4時半から2時間行っているチューター・アワーなどに参加してください。また、毎年夏にドイツで開催される海外語学講座にも是非参加してください。

レポート作成やプレゼンテーションを行う時にも、必ず複数の本を、しかも注釈のある本を読んでもください。それは、他者の視点をも含めて全体を見渡す必要があるからです。今は情報がインターネットを通じて簡単に取れるようになってきました、それだけに「断章取義」の危険性は増大しています。

みなさんが将来働き出して接する顧客は実に多彩です。また、彼らの要求やクレームも多様です。その時は、問題から逃げずに、向き合って自問してください。根本的な良い問いは既に答えにつながっています。この頃 TV では見る機会が少なくなりましたが、「テツ&トモ」の「ナンデダロー、ナンデダロー」を思い起こしてください。私は、彼らが有名になる前から、このフレーズが大好きでしたし、今でも座右の銘の一つです。

参照：<http://www.syllabus.konan-u.ac.jp/customer/open/database/index.jsp>

郷に入っては郷に従え —フランス語の授業における言語と文化—

国際言語文化センター 中村 典子

甲南大学で第二外国語としてフランス語を選択した学生の中には、「フランス語の響きに惹かれたから」「英語と共通の語彙が多いから」という人も少なくはありません。しかし、フランス語を学んでいる学生の大部分の人が、単に「言語としてのフランス語」にのみ興味があるのではなく、フランス語圏の文化に並々ならぬ関心を抱いています。——「フランスの歴史を勉強したい」「いつか南仏を旅行したい」「カナダに留学したい」「フランス映画に興味がある」etc——。フランス語を学ぶにあたって、フランス語圏の文化を知ろうという学生諸君の意欲は非常に高いと言えます。

さて、「明晰ならざるもの、フランス語にあらず」(Ce qui n'est pas clair n'est pas françois [=français].) という有名な言葉がありますが、これは、アントワヌ・ド・リヴァロル Antoine de Rivarol (1753 ~1801) が1784年に書いた懸賞論文『フランス語の普遍性を論ず』(*Discours sur l'universalité de la langue française*) 中にある表現です。リヴァロルは、この論文でフランス語の統語論に関して述べていて「明晰でないものは、やはり英語、イタリア語、ギリシャ語あるいはラテン語である」と続けています。ここから、当時の言語論争の状況を多少とも窺い知ることができます。しかし、ここで私は「フランス語のみが明晰である」などと主張するつもりは毛頭ありません。ただ、日本社会において日常生活で何気なく使っている表現をフランス語や英語などの他の言語に翻訳しようとすると、問題が生じる場合があることを思い出します。例えば「いつもお世話になっております」とか「先日はありがとうございました」などです。日本社会においては、対人関係における「潤滑油」のような表現ですが、フランス語や英語には翻訳

しづらいのです。具体性を伴うメッセージではないからです。言語学者のオースティン Austin やサール Searle 流に言うと、これらの表現は日本の社会習慣に特有の「発語内行為」であり、話し手が聞き手に対して「私はあなたと良好な人間関係を保ちたい」という意図を込めている、とでも言えましょうか。ところで、こうした表現は、なぜフランス語や英語では使われないのでしょうか？

フランス語では、相手に何か依頼した場合とか、相手からプレゼントをもらった場合でも、一週間以上経過すると、「挨拶代わりに」に御礼を言うことは普通ありません。その場で御礼を述べて終わりなのです。例えば、プレゼントをもらったとしたら、必ず相手の目の前で開け、相手にその場で御礼を言います。日本のように、後で開けるという習慣がないのです。また、「コミュニケーションを始める前に相手によい印象を与えたい」という発想也没有ありません。こうした文化にまつわる習慣や考え方を知らないと、相手とのコミュニケーションに齟齬をきたすことがあります。フランス語を全く話せない人がパリで買い物を経験すると、「パリでは店員が意地悪だ」という苦情を漏らします。確かに、日本のデパートで買い物をする習慣が身についている人には、ちょっとしたカルチャー・ショックかもしれません。フランスでは店に入ると、まず客の方から店の人に「Bonjour.」と言うのが礼儀ですし、挨拶もせずに黙って商品を触るのは無礼とされていますから。あくまで言葉を交わすことによってコミュニケーションを成り立たせるのがフランス社会のルールなのです。日本風の「以心伝心」というのは成り立ちません。それから、日本のデパートやスーパーの開店時・閉店時のように、一斉に従業員が並んで、「いらっしゃいませ」、(何も買わなかった人にさえ)「ありがとうございました」などと言う状況は考えられません。日本では「お客様は神様」なのかもしれませんが、フランスでは、客と店員は対等の人間です。言葉を使ってコミュニケーションをする、商品のことをよく知っている店員に客がアドバイスをもらう、というのが基本です。そうでないと物を売ってもらえないことさえあります。実際、何十年も前から、日本からの買い物客がブランド品を大量に買い占める傾向があるため、「日本人には一人三個までしか売らない」というルールがある店も存在すると聞いています。日本では「買ってくれさえすれば誰でもいい」という風潮があるかもしれませんが、フランスでは、大量生産していない品物が多いため、店に商品がなくなると困るという事情からだけでなく、できるだけ多くの顧客と「長年にわたって」よい人間関係を築くことが商売上大切である、と考えられているようです。食器や家具などは何代も使うことを前提として作られており、古い物を修理して使うのが普通なので、客の方でも、店の人と長きにわたって上手に付き合う必要があるのです。

このように、文化にまつわる習慣や考え方というのは、コミュニケーションをする上で非常に大切な要素です。グローバル化が進む現代にあっても、人間と人間が付き



「中級フランス語Ⅳ(フランス事情)」における学生たちのプレゼンテーションの例
<power point 使用>

合っていく上では「郷に入っては郷に従え」（フランス語では、「ローマでは、ローマ人の習慣に従って生活しなければならない」Il faut vivre à Rome selon les coutumes romaines.）という言葉の重要性は変わりません。言語を学ぶ際には文化的要素を把握することが「異文化理解」や「国際理解」の第一歩であると言えます。

国境を越える「我不会死的（僕は死にません）」

—中国語の授業における言語と文化—

国際言語文化センター 石井 康一

○中国語をしっかりと学んで話せるようになることが大切なのはいうまでもありませんが、ことばと一体になった文化的特徴、特に日本の文化との相違点を見落とすことはできません。たとえばご馳走になった中国の方に「先日は本当にごちそうさまでした、本当においしかったです」と流暢な中国語でいうのはお勧めできません。中国ではご馳走になったそのときに心を込めて感謝のことばを述べればそれで充分。日本ではいつまでも感謝の気持ちを忘れないでいることを伝えようとして「先日はどうも」といいますが、中国語の世界ではまるで「もう一度御馳走して下さい」とでもいうようないやらしい感じさえ与えてしまうようです。

○お祝いや贈り物をもらったら、われわれはすぐにお返しをしなければと考えます。しかし中国人は「お返し」と意識させないよう、しばらくたってから形を変えてお返しの気持ちをあらわします。そして、長い時間の中でこういうやりとりを続けることで、人間関係を発展させていきたいと考えます。もし中国人からプレゼントをもらって、あわててお返しを持っていったならば、「あなたとは何の貸し借りも作りたくない」とコミュニケーションを拒絶するような印象を与えてしまうかもしれません。相手のことを思いやり、相手のために何かしてあげたいという気持ちは同じでも、表現がまったく裏返しであることがあるのです。これが異文化だと思います。

○家族は何人？子供はいますか？そして「給料はいくらもらっていますか？」—これは調査でも取り調べでもなく、心の垣根を取り払う中国人のコミュニケーション、知り合ったばかりでもズバリと尋ねられます。相手の好意がわかるだけに、答える勇気がないのを申し訳なく思っています。逆に皆さんが中国語でコミュニケーションをとるときは「こんなこと聞いて失礼かなあ」などと遠慮や躊躇をせずに、覚えた中国語でどんどん質問してほしいと思います。

○観光客相手の店ならば大幅ディスカウントを交渉してみましょう。100元といわれて「30元にして！」という、日本ではけんかを売っていると受け取られる恐れがありますが、中国では決して失礼ではありません。売り手は売値を大きく言い、買い手はできるだけ安くしようとするのが中国の買い物コミュニケーション、その舞台を始めから降りてしまうのはもったいない話です。

○中国における韓流（韓国ブーム）は今もなお熱く、新しい展開も見られます。中韓合作ドラマ『第101次の求婚』は、原案は野島伸司脚本『101回目のプロポーズ』（1991）、脚本は韓国の脚本家書き中国語に翻訳されています。主演は韓国人女優チェ・ジウ、役の設定は中国人のチェロ奏者で、台詞は始めから中国語に吹き替えてあります。人物設定などの細かい違いはたくさんありますが、走ってくるトラックの前に武田



鉄矢が飛び出して「僕は死にません！」と叫ぶ名場面はそのまま中国語で「我不会死的 wǒ bú huì sǐ de」と再現されています。日本のレンタルビデオ屋の韓国ドラマの棚に並んでいる『北京マイラブ』も中韓合作ドラマです。韓国の大会社のドラ息子、放蕩ぶりに怒った父親に「人に頼らず生きてみろ」と強制的に北京にかばんひとつで放り出されるという話です。韓国語と中国語が交錯し、中国の有名な俳優もたくさん出ています。中国映画の棚を見ているだけでは見落としてしまうところでした。日本語・韓国語・中国語、三つの文化がつながってダイナミックに動いているのです。

○中国語基礎Ⅰの授業ではシンプルな文法構造を把握することを目指し、発音面ではピンイン（ローマ字表記）を使用しますが、最終的には簡体字（日本語の漢字とは字体が異なる）を直接読めて書けるようにならないと「使える中国語」にはなりません。その授業に私は上で述べたような異文化に焦点を当てた題材を織り込んでいきます。日中関係の難しい時期だからこそ、中国のことばと文化をしっかりと学び、中国語で自分自身を表現できる力をつけていかなければなりません。学生の皆さんもあの美しい中国語を自分のものにしたいという初心を忘れず真摯に取り組んで、留学生のチューターと交流し、海外語学講座にも、中国語強化合宿にも積極的に参加してほしいと思います。

外国語の授業における言語と文化の総合的学習(韓国語)

国際言語文化センター 金 泰虎

グローバル化時代を迎えて、甲南大学は言語や文化教育に力を注ぐため、いち早く国際言語文化センターという組織を立ち上げました。当センターは、言語教育はもちろんのこと、文化教育まで視野に入れた総合的な教育を行い、人材育成に取り組んでいます。

韓国語の教育について言えば、基礎韓国語から上級韓国語までのレベルを設けて、段階的に習熟させていく教育を行っています。すなわち、基礎韓国語を履修した学習者が中級韓国語へ、中級を終えた者はさらにその上の上級へ進むといった具合です。なお、基礎の授業から「話す・聞く」（会話中心）や「読む・書く」（読解中心）技能に分けて言語教育を行っており、学習の到達度の確認や、就職に役立てるため「検定試験」対策の科目も設けています。

ところで、このように技能別に分けて習熟度による段階別の言語教育を施しても、言語を駆使する上で韓国語に関する文化的背景知識がないと、意志疎通に支障を来すこともあります。つまり、韓国語そのものの意味だけを理解して話したり、行動した場合、誤解を招いたり、時には行儀の悪い人と見なされたりすることもあるわけです。

そこで文化教育、つまり異文化理解のため「韓国事情」・「言語と文化（韓国）」・「国際理解」と言った科目を設定しています。これらの文化の授業では、言葉の意味だけでは誤解を生じかねない事柄について詳細な説明を行い、的確な行動に移すことができるようにします。

例えば、韓国語学習の中で「짜장면（ツチャジャンミョン）」、「잘 먹겠습니다（ジャルモッケスムニダ）」、「국밥（グッパブ）」などの食事に関する言葉が登場します。まず「짜장면」は、そもそも中華料理の「ジャージャー麺」であるが、韓国風にアレンジした、手ごろな人気のある庶民の外食料理です。ところが、男性が初対面の女性に「짜장면」を食べに行きましようと言うと、「私はあなたには、興味がないので帰って下さい」という意味になるのです。なぜかという、この食べ物は麺の上に黒い具が乗っていて、これをよくかき混ぜて食べる料理なのですが、食べる時口元が真っ黒になってしまいますので、一般的に女性は初対面の男性の前で食べるの

を嫌います。そのことを承知した上で男性が誘ったということは、つまりその女性に興味がない、という意思表示になるというわけです。

そして、「잘 먹겠습니다」は食事の際、「いただきます」の意味で使う言葉ですが、日本ではおごる側も、おごられる側も同時に使う言葉です。しかし、韓国でのこの言葉はご馳走される側の言葉であって、食堂に行ったとき、「잘 먹겠습니다」と言えば、「私は食事代を払いません」の意味になります。

また、「국밥」は日本の焼肉屋でもお馴染みの「クッパ」のことで、大きな器にご飯を装って、その上に汁をかける料理です。これはスプーンを使い、器を食卓に置いたまま食べる料理で、もし日本の食事作法のまま手にとって食べたら、行儀の悪い人として扱われるのです。

このように言語の背後に隠れている真の意味が分からない限り、韓国語そのものを理解していても、誤解を生んだり、礼儀に反する行動をとる可能性があることから、韓国文化に対する詳細な教育を行っているのです。この場合、文化科目は言語教育の補完の役割を果たしており、また補完という受身的な意味合いだけではなく、韓国文化教育を通じて言語学習に取り組む意欲、モチベーションをさらに高めたり、積極的な異文化理解へ導く役割も果たしています。

例えば、韓国人の情緒を理解させるために、依然、韓国社会の全般に潜在している「儒教精神」を取り上げています。それに対する「韓国文化に関する授業は韓国語の勉強をより楽しく面白くしてくれた」という学習者からの反応は、韓国文化を知ることによって、言語学習の意欲も共に深まったということを意味します。また、韓国文化に関する知識をもって、最近、日本で人気を博している韓国のドラマや映画に出てくる文化的な場面も理解できるようになったという声は、文化教育が異文化理解にまで繋がっていることを示しています。

以上、韓国語の場合、言語と文化の教育が総合的に融合し合って一体となっており、異文化理解にも繋がったという学習者からの反応は得ることができています。

しかし、言語と文化教育におけるすべてのことが整合性のもとで流れているわけではなく、課題も残されています。今後、この課題の解決に向けて、さらなる検討が必要だと考えています。

異文化の中で、異文化と対話する

—日本語の授業における言語と文化—

国際言語文化センター 森川 結花

甲南大学では毎年協定校からの留学生を年間プログラム（9月～翌年5月）および夏期日本語集中講座（6月～7月）の2コースで受け入れています。留学生の目的はもちろん、生きた日本語の習得と日本文化の体験です。文化については既に子ども時代から各種メディアを通じてなじんでいる人がほとんどで、実際に日本に来て見る物聞く物すべてが新鮮！と感じる留学生の方がむしろ少数派、というのが近年の傾向です。ちなみに、今年度の年間プログラム在籍者20名（中級～中上級の学習者）にプログラムスタート1ヶ月目の時点で「来日してカルチャーショックを受けたか」と尋ねてみたところ、「はい」と答えた人は7名（35%）、これに対して「ない」は12名（60%）でした。この結果を彼ら自身は、「本国で日本文化についての講義をとった」「来日は3度目なので」「日本と自分の国はそんなに違いがない」「友達が日本人だから」と自己分析しています。

そんな彼らにも「これは日本独特のものだなあ！」という小さな発見や、ある種の違和感もあるようです。たとえば、あんパン、自動販売機、電車の中でのマナー、ゴスロリ、女子高生、ブランド志向、男性のファッション感覚…と、この辺までは面白おかしい発見なのですが、日常生

活の中で、エネルギー節約のため冷暖房を我慢させられること、「お母さん」が完全に家事一切を取り仕切っていて留学生がお手伝いをさせてもらえないこと、食べながら歩くと必要以上に目立ってしまってきたり悪いことなど、些細なことながらも異文化摩擦は確かに始まっているのですね。

留学生の中には、「日本語は勉強する必要があるけれど文化は勉強する必要がない。だって、ここは日本なのだから！」と断言する人もいます。それが、彼らなりの武者修行のイメージなのかな？とも思いますが、本当にそんなに自然習得に期待していいものなののでしょうか。たとえば、日本文化の中では留学生の存在自体が異文化であり、自分自身が周囲の日本人にカルチャーショックを与える加害者となっているのかもしれないことにまで気づいているだろうかとか、そんな場合に日本人にはどんな言葉でフォローするべきかとか、考えれば考えるほど、「自然」のままには放っておけない課題が山積しているはずなのです。

外国語の授業としての日本語のクラスでは、夏期日本語集中講座での「日本語体験学習」では日本の文化に触れる活動が大きな特色となっていますが、年間プログラムでは特に日本文化を紹介するような学習活動が主になっているわけではありません。それよりも、留学生自身の周囲にある日本文化を取り上げて教材とし、語学的なトレーニングをすると同時に「深く考え、よく話す」ための題材（ネタ）にしているといったところでしょうか。中級、上級は教科書の構成からしてこの方針が貫かれていますし、近年は初級でも場面・機能シラバス中心ですから、文化的な背景なくして日本語の学習は進められないと言ってもいいぐらいです。また、「今日は休ませてください」のような文型ですと、文法的な解説に加え文化的背景の説明も必要になってきます。言葉そのものが文化と共にあるのが日本語の特徴です。それが学習者にとっては日本語の魅力でもあると同時に、高い高いハードルともなり得ます。でも、そこを日本と日本文化に対する愛着でもって乗り越えてほしいのです。

過去の留学生たちは日本語を使って日本人と対話し、日本文化に内在している「何か」を発見していきました。その一例が次頁のマンガ作品です。対話し、発見し、表現する—このプロセスで必要となる日本語力のサポートを、これからもしていきたいと思います。

＜夏期日本語集中講座 体験学習＞



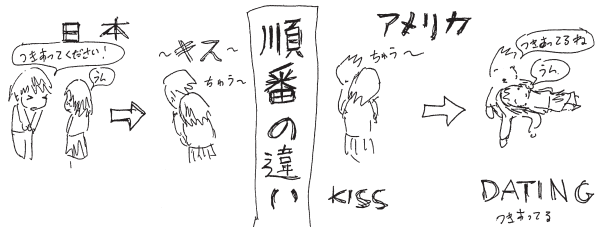
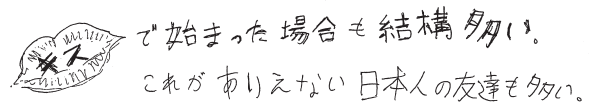
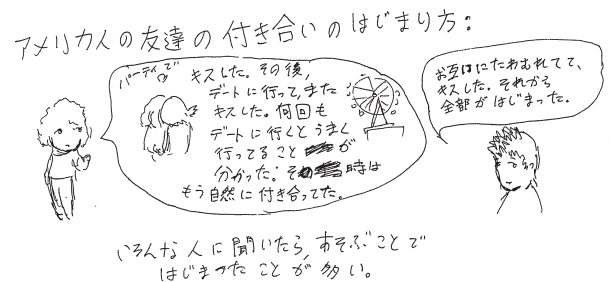
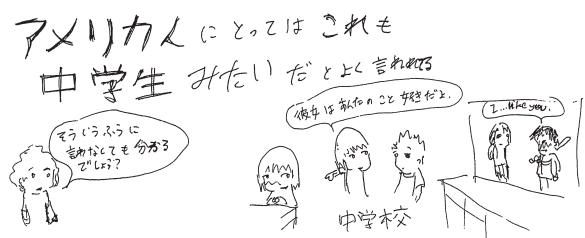
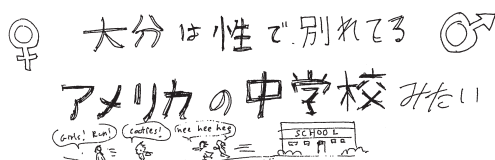
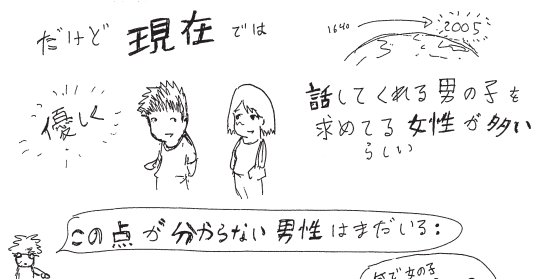
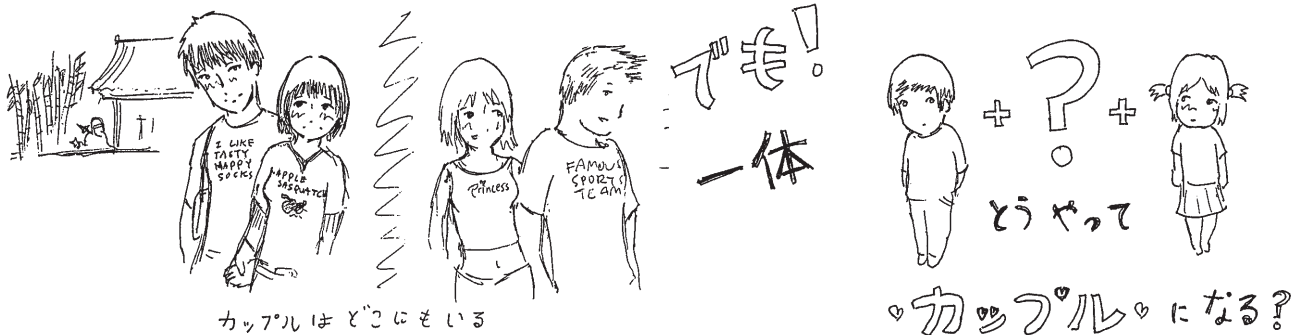
—小学生との交流のため児童館を訪問して—
(七夕祭り)



—書道部との交流より—

日本とアメリカ：「付き合う」って何??

——よく誤解されること——



デビン・シモンズ(2004～2005留学生)ピッツバーグ大学

～2005年度国際言語文化センター活動報告～

FD活動（アクティブスチューデント育成プラン）

・チューター制度の開設

2004年度からの取り組みで、外国語学習に対して意欲的な学生が積極的に参加。2005年度前期（6月～7月）はドイツ語・フランス語・中国語・韓国語で開設し、後期（9月～12月）には新たに英語も加わり、参加者から長期留学を希望する学生が出るなど、さらに語学力向上を目指して有意義な教育活動となった。

・強化合宿の実施

昨年度はドイツ語とフランス語のみの実施であったが、2005年度は第2外国語（ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語）の足並みが揃い、全言語での実施となった。平生記念セミナーハウスを利用して外国語のみで生活する擬似空間を2泊3日体験。コミュニケーション能力のスキルアップを図ることができた。（＊ドイツ語強化合宿 2006年1月12日まで申込受付中）

特別講座「TOEIC 夏期集中コース」

8月1日～11日の9日間にわたり実施。1年次を対象に英語 TOEIC テストの対策講座。24名の学生が受講し、700点を獲得した学生を含む3名が600点以上の目標値を達成した。

外国語科目・日本語科目成績優秀者表彰

2004年度末の成績優秀者を4年次生のみ対象に3年次までの成績を基準にして決定した。文学部12名、経済学部3名、法学部4名、経営学部1名に授与された。日本語科目についてはイリノイ大学の学生が1名表彰された。

言語教授法・カリキュラム開発研究会

・国際シンポジウム（第19回全体研究会）

7月2日（土）13時～16時30分開催。テーマは「第二次世界大戦後60年の総決算—アジアの若者の未来のために—」。約150人の方にご参加いただき、シンポジウムの内容は毎日新聞、読売新聞などにも報道された。（紀要「言語と文化」第10号にシンポジウム内容を掲載予定。）

・第20回全体研究会

11月12日（土）13時30分～16時開催。テーマは「外国語の授業における言語と文化の総合的学習—実践報告と今後の課題—」。授業に直接結びつくテーマで具体的な討論が展開された。

社会人講習会『言語講座』

前期（4月～7月）・後期（9月～12月）各期毎土曜日の10回、英会話・ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語クラス合計16クラス開講。前期338名、後期300名の社会人が受講。

社会人講座

7月23日（土）開催。総合テーマは「異文化理解への道」。国際言語文化センターの専任教員4名がリレー式に講演（1講演60分）。受講者233名。

夏期日本語集中講座

6月13日（月）～7月22日（金）実施。甲南大学と提携している海外からの大学から学生を受け入れて夏期集中で開催。今年度はハワイ大学から13名の留学生が参加。